

ハンドボール競技における個人技術の一考察： ボール保持からの攻撃展開に着目して

A Study of Personal Skills in Handball Competition: Focusing on the Attack Development from Holding the Ball

キーワード：女子世界ハンドボール選手権・攻撃方法・攻撃局面・ドリブル・フェイント

八尾 泰寛

YAO Yasuhiro

1. 緒言

ハンドボール競技に関する情報は、世界選手権やオリンピックにおいて、個人技術や個人戦術、コンビネーション、チーム戦術ごとに変化の様相を見せる。

そのベースとなるものは、「走る」・「跳ぶ」・「投げる」という人間の基本動作で構成され^{1) 2)}、1時間の競技時間内(前半、後半30分)に攻防を展開し、シュートによって得点を競う競技である³⁾。試合の勝敗は、競技時間内で対戦相手よりも多くの得点を挙げたチームが勝利となることで、対戦相手よりも多くの得点を挙げなければならない。

ハンドボール競技の試合構造は、攻撃権の獲得から速攻(Fast Break)、遅攻(Set Offense)で攻撃活動が行われ、攻撃の完了とともに防御活動へ移行し、相手に対し帰陣(速攻に対する防御)、防御の組み立て、防御システムへの展開が行われる。杉森は⁴⁾、試合展開について、複雑な攻防の中で、瞬間的に判断し行動を起こし、それぞれの目的を達成するため、味方同士が協力し合って有利な状況をつくと述べている。そして、大西らは⁹⁾、攻撃の技術、戦術について、シュートに関与した突破技術やパス技術等、個々の攻撃技術およびグループ、チームとし

ての攻撃戦術が徹底され、大きな展開を遂げる傾向にあると述べ、個人技術のステップワークやボールハンドリングを基に、グループ、チーム戦術で防御隊形を崩し、シュートを成功させなければならない。しかし、攻撃における個人技術は、試合の過程において現れ、その技術の実施については、図式化するのは非常に難しいと述べられ⁵⁾、その理由は、動きが複雑で、ひとつの技術で始まり、ある時点で中止され、他の技術が行われるからである。その個人技術は、ボールハンドリング(パス・キャッチ・ドリブル)、フェイントステップ、シュート(ジャンプシュート、スタンディングシュート)が主な個人技術であるが、杉森は⁴⁾、個人技術に必要な情報について、時間・得点経過・空間(スペース)・選手(人)・ボールに関する情報であると報告している。

そこで本研究では、世界のトップレベルの試合映像をもとに、遅攻時におけるボール保持後の個人技術であるボール保持の仕方、パス、ドリブル、シュートの動作を検証し、数的均衡状態を破るための技術を検討し、効果的な身体操作、ボール操作に関するトレーニングの資料を得ることを目的とした。

2. 方法

対象試合は、第24回女子世界選手権2019(日本、熊本大会)ハンドボールのSemifinal、Finalの3試合を分析の対象とした。

分析項目は、分析にあたり試合全体像を明らかにするために攻撃評価をスコア用紙に記入した。1) 攻撃回数、2) 得点数、3) シュート数、4) ミス数をカウントし、攻撃成功率、シュート到達率、ミス率を算出した。

また、遅攻時における攻撃の展開局面から、ボール保持後の個人技術を明らかにするために、ポジションの配置後、突破を試みる動きを以下の項目ごとに集計用紙に記入し、ボール保持の仕方からパス、シュート、ドリブル、フェイントの動作を明確にした。

- 5) キャッチ→シュート
- 6) キャッチ→パス
- 7) キャッチ→ドリブル→シュート
- 8) キャッチ→ドリブル→パス
- 9) キャッチ→ドリブル→フェイント→シュート
- 10) キャッチ→ドリブル→フェイント→パス
- 11) キャッチ→フェイント→シュート
- 12) キャッチ→フェイント→パス
- 13) キャッチ→フェイント→ドリブル→シュート
- 14) キャッチ→フェイント→ドリブル→パス

3. 結果

第24回女子世界選手権2019(日本、熊本大会)ハンドボールのSemifinal、Finalの全体における攻撃評価を図1に示した。1試合あたりの攻撃回数は 57.7 ± 3.9 回、得点数は 29.0 ± 3.9 点、攻撃成功率は50.3%、シュート数は 46.5 ± 4.5 本、シュート到達率は80.6%、ミス数は 11.2 ± 2.6 回、ミス率は19.4%だった。

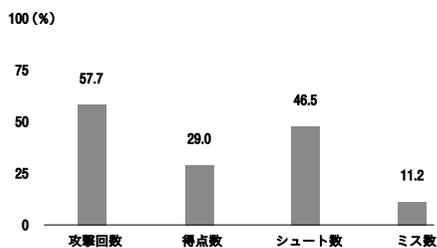


図1 1試合における攻撃評価(%)

ポジションごとの攻撃開始局面を図2に示した。LW3.5%、LB25.3%、CB41.9%、RB23.6%、RW5.7%であった。

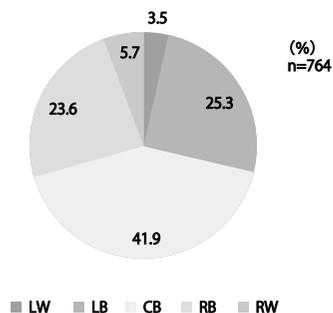


図2 ポジションごと攻撃開始局面の割合(%)

個人技術における攻撃手段の割合を図3に示した。ボール保持のキャッチ→シュートorパスが23.0%、ボール保持時のキャッチからドリブル→シュートorパス、キャッチからドリブル→フェイント→シュートorパスが34.8%、ボール保持後のキャッチからフェイント→シュートorパス、キャッチからフェイント→ドリブル→シュートorパスが42.2%であった。

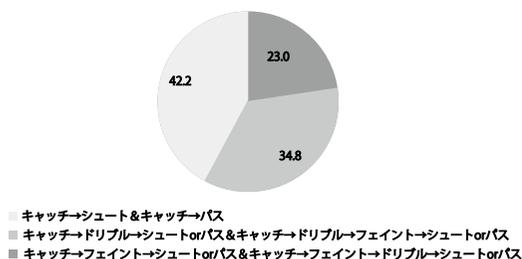


図3 個人技術における攻撃手段割合 (%)

個人技術におけるボール保持後の最終攻撃手段別割合を図4に示した。ボール保持のキャッチ→パス、キャッチ→ドリブル→パス、キャッチ→ドリブル→フェイント→パス、キャッチ→フェイント→パス、キャッチ→フェイント→ドリブル→パスでの完了が67.1%、キャッチ→シュート、キャッチ→ドリブル→シュート、キャッチ→ドリブル→フェイント→シュート、キャッチ→フェイント→シュート、キャッチ→フェイント→ドリブル→シュートでの完了が32.9%であった。

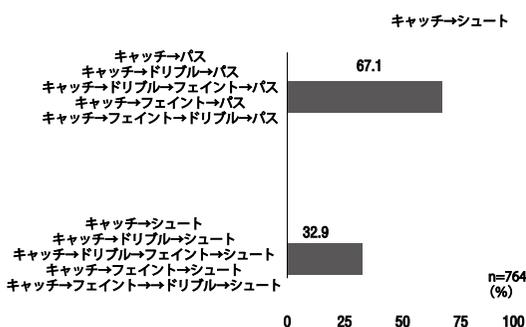


図4 個人技術におけるボール保持後の最終攻撃手段別割合 (%)

個人技術におけるボール保持後のドリブル展開を図5に示した。キャッチ→ドリブル→シュートが11.3%、キャッチ→ドリブル→パスが44.0%、キャッチ→ドリブル→フェイント→シュートが9.8%、キャッチ→ドリブル→フェイント→パスが34.9%であった。

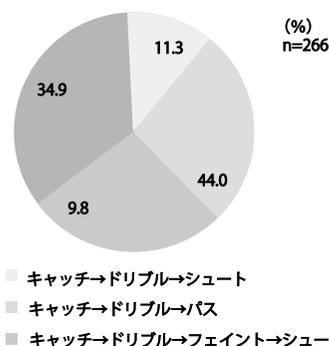


図5 ボール保持後の個人技術(ドリブル)における攻撃割合 (%)

個人技術におけるボール保持後のフェイント展開を図6に示した。キャッチ→フェイント→シュートが17.4%、キャッチ→フェイント→パスが49.1%、キャッチ→フェイント→ドリブル→シュートが6.8%、キャッチ→フェイント→ドリブル→パスが26.7%であった。

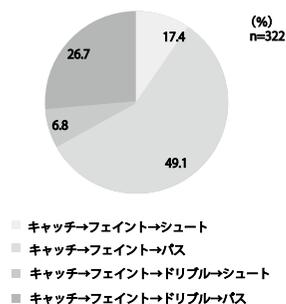


図6 ボール保持後の個人技術(フェイント)における攻撃割合 (%)

4. 考察

第24回女子世界選手権2019(日本、熊本大会)ハンドボールのSemifinal、Finalの1試合あたりの攻撃は約30秒以上かけられ攻撃が行われている。大西は⁶⁾、ハンドボールの先進国であるヨーロッパでは、ハンドボールのゲームを幾つかの局面の連続体として捉え、チームの指針としてどの局面を重要視するのか、そして、その一つ一つの局面に対して、どのようなチーム戦術を採用するのかを、チームの構成

員の技術・戦術的能力を考慮しながら決定していると述べている。また、遅攻では、ポジションの配置からパス回しで防御をゆさぶり、防御に対しての突破からシュート完了を目的として攻撃が組み立てられていると述べられている⁷⁾。また杉森らは⁸⁾、ハンドボールの技術・戦術は、シュートの機会をより多く持ち、これを高い確率であげるものであると述べ、世界のトップレベルでは、10回の攻撃で8回のシュートで攻撃が完了し、攻撃2回に1回得点を挙げている。

ミスプレーについて杉森らは⁹⁾、ゲームではボールの扱いによって生じるプレーが半数以上であることと報告していることで、世界のトップ選手は、ボールハンドリングのパスワークやドリブル技術が高く、優位な状況をつくる動作の際に歩数違反であるオーバーステップや防御側にぶつかる、妨害の行為違反のチャージング、また、攻撃側のゴールエリア侵入違反によるラインクロスなどの規則違反など含め、ミス率が約2割と低かったことで、精密かつ正確なプレーが重視され、一つ一つの果たす役割効果がゲームの結果の表れであると推察された。

攻撃が開始される局面のポジションは、攻撃の中心であるバックプレーヤーが全体の約9割で、バックプレーヤーのみで見ると、コート中央に位置するセンタープレーヤーが約5割であった。村上らは¹⁰⁾、大きく分けてみると、ボールを保持しているプレーヤーの攻撃的なプレー、つまり、フェイントや相手の防御者と防御者の間を狙って切込み相手を引き付けるようなプレーなど、ボールを保持していないプレーヤーとの攻撃活動に移り、各々のポジションにはポジション特有の傾向というものがあると述べている。このことから、攻撃の開始局面ではセンタープレーヤーがボールを保持し、意図的に相手ディフェンスの均衡状態を崩すために攻撃が開始されていることがわかる。

個人技術における攻撃手段では、ボール保持からフェイント動作、ボール保持からドリブル動作が約8割を占めていた。このことから、ボール保持する攻撃者は意図とする動作の前に、まったく意図とは逆の動きを表示することで、意図的に相手防御者の均衡状

態を崩すことを目的とした活動が行われていた。世界のトッププレーヤーは攻撃バリエーションを駆使しつつ、豊富な技術を多用する運動の組合せを中心に攻撃を行っていることがわかる。ボール保持からシュート、ボール保持からパスの単純化した運動の組合せは、10回の攻撃に2回程度であったが、1試合の攻撃回数が60回前後と報告されていることで、防御側の間を逃さず攻撃を行っていることが推察できる。

個人技術におけるボール保持後の最終攻撃手段のパス・シュート別では、パスが約7割、シュート完了が約3割であった。ハンドボールの防御プレーヤーの活動は、攻撃プレーヤーのシュートや突破の試みを阻止することで¹¹⁾、攻撃者は個人技術により防御間の突破を試みているが、突破を阻止されていることが推察される。また、シュート完了が約3割であったことは、1対1の場面において、攻撃者をマークする防御者は正対した状態を保ち続けることが重要であるが¹²⁾、世界のトッププレーヤーは、ボール保持時の個人技術では、運動の組合せを多くするバリエーションが多く、相手防御者との均衡状態を崩すためには必要な技術を駆使していることが伺える。

個人技術におけるボール保持後のドリブル展開では、キャッチ→ドリブル→シュートが攻撃10回に約1回、キャッチ→ドリブル→パスが攻撃10回に約5回、キャッチ→ドリブル→フェイント→シュートが攻撃10回に約1回、キャッチ→ドリブル→フェイント→パスが攻撃10回に約3回であった。ボール保持からのドリブルは防御者との距離が長いこと、また、ドリブルを使用することでコート内の空間を広く使えることがあげられるが、ドリブルによるボール運びはパスと比べると攻撃行為が遅らせることで¹³⁾、キャッチ→ドリブル・キャッチ→ドリブル→フェイントの運動組合せでも個人技術の最終動作はパスが多くなることがわかる。このことで、防御側からするとパスをインターセプトすることが容易となることが考えられるが、コート内の空間を広く使えることで、世界のトッププレーヤーは、絶えずシュートを狙い、また一人の攻撃者で二人の防御者を引き付けることを目的に前後・左右へのドリブルを駆使していると思われる。これは、ボール保持者とボールを持っていない非保持者とのコンビ

ネーション、組み合わせが明確になっているのではないかと推察される。

個人技術におけるボール保持後のフェイント展開では、キャッチ→フェイント→シュートが10回に約2回、キャッチ→フェイント→パスが10回に約5回、キャッチ→フェイント→ドリブル→シュートが10回に1回、キャッチ→フェイント→ドリブル→パスが10回に約3回であった。フェイントは本当の意図を隠すために重要な要素であり、高度な能力の発達とバリエーションが必要で、防御者が接近しているのか離しているのか、隣の防御者がどのようなポジションに位置しているのかなど、適切なフェイントの選択決定が必要である¹³⁾。フェイント時の防御者との距離は1.5mから2.0m)の間合いとされ¹⁴⁾、防御間へ切り込むことが可能となる。突破時におけるフェイント動作時の防御との位置関係について、防御から左・右側にずれた位置が約7割で防御者の正面が約3割であり、パスに合わせて防御者からずれた位置取りをしていると報告されている¹⁵⁾。このことで、世界のトッププレーヤーは、相手防御に対し、優位な位置取りから空間を攻めることを目的として、ボールを保持する際は、フェイントの間合いから運動の組合せを行い、防御間を絶えず攻撃していることが伺える。

また、世界のトップチームは、ミス率について20%以内に抑え、ゲーム運びに関する個人技術が徹底され、技術力の高さを報告し¹⁵⁾、ハンドボール競技はコートプレーヤー6人でお互いのチームが一つのコートで入り乱れて競技が行われることから、絶えずシュートを狙うための必要なシュート技術、ボールハンドリング技術、ステップワークにおける個人技術の運動の組合せが重要で、防御側のカバーリングが必要な状況を作ることを目的に攻撃が行われていると思われる。

5. まとめ

本研究では、世界のトップレベルの第24回女子世界選手権2019(日本、熊本大会)ハンドボールのSemifinal、Finalの3試合映像をもとに、遅攻時にお

けるボール保持後の個人技術であるボール保持からパス、ドリブル、シュートの動作を検証し、数的均衡状態を破るための技術を検討した。結果として以下の所見を得た。

- (1) 世界のトップレベルでは、10回の攻撃で8回のシュートで攻撃が完了し、攻撃2回に1回得点を挙げている。
- (2) ミス率が約2割と低かったことで、精密かつ正確なプレーが重視され、一つ一つの果たす役割効果がゲームの結果に表れていた。
- (3) 多くの攻撃開始局面ではセンタープレーヤーがボールを保持し、意図的に相手ディフェンスの均衡状態を崩すために攻撃が開始されていた。
- (4) 世界のトッププレーヤーは攻撃バリエーションを駆使し、豊富な技術を多用する運動の組合せを中心に攻撃を行っていた。
- (5) ボール保持後のドリブルでの展開は、ボール保持者とボール非保持者のコンビネーションが重要である。
- (6) ボール保持後のフェイント展開では、世界のトッププレーヤーは、相手防御に対し、優位な位置取りから空間を攻めることを目的として攻撃活動が行われていた。

引用・参考文献

- 1) 豊田賢治(2017):ハンドボール競技のゲーム特性に関する国際比較. 国士舘大学体育・スポーツ科学研究第17号: pp.29-36.
- 2) 上野義弘(1983):ハンドボール競技のシュートにおける基礎的研究. 青山学院大学一般教養部会論集第24号: pp.287-293.
- 3) 石井喜八(1989):女子ハンドボール選手のオーバースロー・ハンドスローの分析. 日本体育大学紀要第19巻1号: pp.9-14.
- 4) 杉森弘幸(1998):ハンドボールのゲーム観察に関する一考察(1). 岐阜大学教育学部研究報告第22号: pp.23-30.
- 5) ハンドボールの技術と戦術. ベースボールマガ

ジン社. 東京:pp.15-158.

- 6) 大西武三(1997):ハンドボールのゲームにおける局面の構成について.筑波大学体育科学系紀要第20号:pp.95-103.
- 7) 大西武三・水上一・川村レイ子(1983):現代スポーツコーチ実践講座7ハンドボール.ぎょうせい:東京.
- 8) 杉森弘幸・大西武三・水上一・川村レイ子(1991):ハンドボールのミスプレーに関する一考察.筑波大学運動学研究第7巻:pp.93-96.
- 9) 大西武三・水上一・河村レイ子・加古川巳由紀(1993):ハンドボールにおけるラインプレーヤーの突破動作についての研究.筑波大学運動学研究第9巻:pp.85-91.
- 10) 村上成治・土井秀和・長岡雅美(1995):大阪教育大学紀要第44巻第1号:pp.53-60.
- 11) クンスト・中村一夫訳(1981):ハンドボールの技術と戦術.ベースボールマガジン社:東京.pp.209.
- 12) 船木浩斗・會田宏(2014):ハンドボール競技のセットディフェンスにおける1対1のプレー方法に関する研究.体育学研究59:pp.329-343.
- 13) G.シューラー・I.コンツァック・H.デブラー・唐木国彦監訳(1993):ボールゲーム指導辞典.ハンドボール.大修館:東京.pp374-378.
- 14) 荒川清美監修・石井喜八・北川勇喜編著(1976):写真と図解によるハンドボール.大修館書店:東京.pp.59-63.
- 15) 八尾泰寛(2018):ハンドボール競技の個人技術に関する研究:ヨーロッパ選手とアジア選手の攻撃時のボール保持の仕方について.東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第53号:pp.183-188.